

べていると、大正15年（1926）発行の『今宮町誌』（編纂：大阪府西成郡今宮町残務所）の「木津の墓」に七墓の場所が記されていた。それによると「木津の墓は古来大阪の七墓、即ち千日前、梅田、福島、天王寺、鶴田、東成郡榎並と同じく七墓の一に加へられた場所」とあった。

また筆者が調べた中では最も詳しく七墓巡りについて書かれている文献は昭和10年（1935）発行の『郷土研究 上方』（編者：南木芳太郎）「上方探墓號」なのだが、こちらでは七墓について「その場所は時代によって多少の変遷があり、又振出の都合にて手近の墓所のみを巡った形跡もある。その場所を挙げると、北よりすれば梅田、南浜、葭原、蒲生、小橋、高津、千日、飛田辺りが古い時代のもので、明治になると長柄、岩崎、安部野辺りが加わっている、その他、安治川、大仁、野江等の三昧も七墓巡りの中に入れねば成るまい。もっと小さな墓所も場末にはあったであろう」とあった。

整理すると『賀古教信七墓廻』の8カ所以

外にも「⑨木津」「⑩福島」「⑪天王寺」「⑫榎並」（以上『今宮町誌』より）「⑬南浜」「⑭岩崎」「⑮安部野」「⑯安治川」「⑰大仁」「⑱野江」（以上『郷土研究 上方』より）と合計18カ所の墓が七墓として紹介されている。いろんな文献を渉猟すれば、その数はさらに増えていくのではないだろうか。

要するに孟蘭盆会の頃に大阪市中にあった墓をどこでもいいので7カ所巡れば大阪七墓巡りとして結願したと筆者は推測している。ルール（？）としては、非常にゆるやかで、おおらかな墓参りといえる。またこうした七墓参りをすると「自分の葬式の時に晴れる」というご利益があったという。

2 七墓を巡っていた人々とは？

次に七墓巡りを実施していた団体についてだが、これも正直なところ、よくわかっていない。「講」のようなものがあったのかも知れないが、無縁仏を供養するということは、死者との生前の関係性なども問われない。誰でも参加可能な風習で、「無縁者の集まり」といえなくもない。また七墓のひとつである南浜墓地近くの浄土宗源光寺境内には「七はか道」の石碑が現存しているが、こうした石碑が必要なほど、大勢の参加者が七墓を巡ったということなのかも知れない。

『郷土研究 上方』でも、どんな団体が七墓を巡ったかの詳しい記述はなく「今は途絶えたが、貞享、元禄の昔より明治初期に至るまで久しい間、大阪では孟蘭盆になると心ある人々は七墓巡りと称して諸霊供養のため、7カ所の墓地を巡訪して回向したものである」とある。「心ある人々」がやったというが、確かに現代の墓参りは基本的には近親者や知人、友人といった有縁の関係性の死者を墓参りするものだから、わざわざ無縁の死者を墓参りするのは「心ある人々」のように

感じられなくもない。

ただ七墓巡りの参加者は鐘や太鼓を鳴らしながら歌舞音曲と共に巡ったそうで、実際に『郷土研究 上方』の挿絵「孟蘭盆会七墓巡り之図」（長谷川貞信）をみても陽気な一団が街中を練り歩いている様子が伺えて、供養というようは一種の演芸、遊興、娯楽のような晴れやかな雰囲気が感じられる。現在でいえば「盆踊り大会」のようなもので、筆者も子供の頃に盆踊り（先祖供養）よりも屋台が楽しいと思った記憶があるが、七墓巡りも無縁仏の供養というのを一種の大義名分にして、町衆のレクリエーションといった要素も強かつたように思われる。

3 無縁を基礎として都市は成り立つ

しかし、こうした有縁の死者、無縁の死者といった縁（関係性）の有無を超えた供養の風習が、江戸時代の大阪で成立していたことは非常に興味深いことである。これはおそらく都市という「場」（トポス）の性格が大きい。

例えば村落の風習などは、基本的には先祖代々の土地に生きる人々の中で育まれる。その風習の多くは有縁の村落社会の繋がりを再確認する仕組みとして機能している。外部の者、余所者、他者は村の神輿などは触ったり、担いだりはできない。有縁の、同一の価値観、共通の世界観の持ち主は尊重するが、無縁の、異なる価値観や理解できない世界観の他者には自然と排他的な親密圏となっている。

しかし都市はそもそも無縁の人々の集まりで構成される。戦後の日本社会でもベビーブームを迎えて爆発的に人口が増えたが、長男は家や田畠を受け継ぐが、次男、三男などは受け継ぐ家や田畠などはなかった。結果として長男以外の息子や娘たちは、東京や大阪、愛知といった大都市に移住して高度経済成長の担い手になっていった。

そういった大都市では流入人口が多いので、「隣に誰が住んでいるかわからない」といった社会状況が自然発生するが、実はこの「無縁性」こそが、都市の都市たる基礎条件となる。そういう都市で自然発生する風習は無縁ということに、それほど頓着しない。むしろ、みんな同じような無縁の存在であるからこそ、お互いに支え合おうという発想も誕生するといえないだろうか？

4 大阪夏の陣と大阪七墓巡りの関連性

そして、このような戦後大阪の「隣に誰が住んでいるのかわからない」という社会状況は、実は江戸時代初期の大阪でも起こった。ご存じのように大阪は桃山時代（1583～1598）には豊臣武家政権の首都であったが、夏の陣（1615）によって徳川方に敗北してすべてが灰燼と化してしまった。当時の様子を伝える古文献によれば「大坂にこもったる衆は、命ながらへたる衆は、ことごとく具足をぬぎ捨て、裸にて女子もにげちら」（大久保彦左衛門『三河物語』）とあり、つまり戦闘員だけではなく大阪城周辺にいた非戦闘員（町衆、女、子供など）も惨殺されたと記述されている。他にも「多くの人は約10万人が死んだ」と言い、町の中で殺された人々のほか、合戦が行われた周辺も死体で埋まっていた。大坂の川（大川）は水が豊富で非常に深いだけに、敵の武器や火事を免れようとしたら多くの人々のために、かえって墓場と化した。川底は死体で埋もれ、向岸へ渡ろうとすれば、その上を歩かねばならないほどであった」（『切支丹研究第17集 耶蘇会史料』）といった記録などもある。

太平洋戦争時の大阪大空襲の死者・不明者数が約1万5000人であるので、どこまで事実であるかはわからないが、本当に夏の陣で約10万人の人々が殺されたとするならば、



図1 長谷川貞信「孟蘭盆会七墓巡り之図」
（『郷土研究上方』より）